

# 財産を守る

明治村に溶け込む生活

**登**米市を代表する観光地「みやぎの明治村」。そう呼ばれる登米のまちには、江戸時代の武家屋敷、明治時代の建造物や重厚な蔵造りの商家が多く残り、歴史と伝統に包まれた町並みが、当時の面影を伝えている。明治の近代建築を象徴する教育資料館（旧登米高等尋常小学校）と警察資料館（旧登米警察署）は、1873（明治6）年にウィーン万国博覧会に派遣され、洋風建築の技術を取得した山添喜三郎氏が設計。バルコニーの柱頭に、ギリシャ建築のイオニア式などを取り入れた壮麗な建物である。

これらの建物は、観光施設として整備されたものではない。武家屋敷のほとんどは、現在も人が暮らす民家。歴史的な町並みの中に、今もなお人々の生活が自然に溶け込んでいる。私たちにとって当たり前前の町並みは、来訪者には、ハイカラなロマンあふれる明治時代を感じさせる空間なのだ。



1 明治時代に建築された商家。奥には蔵が残り、今でも使用されている



2 江戸時代に使用されていた武家屋敷「春欄亭」。休憩所として利用できる

受け継いだ責任がある

**文**化財を確実に維持し、継承していくためには、適正に保存する必要がある。東日本大震災では、教育資料館の壁やガラスが破損するなど、甚大な被害を受け、大規模な修繕を施した。個人が所有する蔵なども同様に損壊したが、所有者らの努力により、元の町並みが復活している。登米町後小路に住む菅野芳郎さんが運営する私設博物館「町屋ミュージアム 廻船問屋 菅勘資料館」も東日本大震災により損壊した。

菅野さんが、父親の遺品を整理したところ、江戸期からの商売道具や生活用品などの所蔵品が多数見つかった。「貴重な歴史資料を、多くの人に見てもらいたい」と明治に建築された自身の生家と蔵を私財を投じて改修し、2009年に開館した。菅野さんの先祖である菅野勘兵衛氏は、江

戸から明治時代にかけて廻船問屋を経営していた。北上川を利用して米や生糸などを船で運び、東京や福井県まで取引を拡大した。資料館には、当時の漆器、滑車や資料などを展示している。

「建物が壊れたときは、続けるべきか悩んだ。しかし、先祖から受け継いだ文化財を守る責任があると思ひ修復した。これからもできる限り続けていきたい」と昔の登米を未来に伝えることを選んだ。



菅勘資料館オーナー 菅野芳郎さん(83)



菅勘資料館：現在は常時開館していないため事前に連絡が必要（☎0220-52-2208）

## 「登米懐古館」

を新たに整備

市は、貴重な文化財を守るため、旧登米町の名誉町民、渡辺政人氏から寄贈された登米懐古館の老朽化に伴い、新たに（仮称）新登米懐古館の建設に着手した。設計は、登米町にある森舞台や新国立競技場を手掛けた隈研吾建築都市設計事務所が担当。登米産のスレートや市内産材を使用した建物が、歴史を継承する。

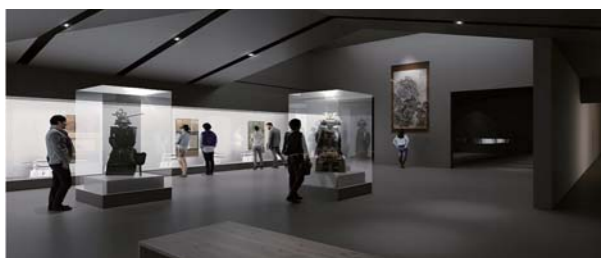
平成31年9月ごろ開館予定



外観：歴史と文化を保存し、観光と市民交流を活性化



土間ホール：庭の緑へと視線が抜ける開けた空間



展示室：展示品を際立たせる静かで落ち着いた空間

## Interview



角田雄一郎さん(30)

若い人や外国人にも魅力を感じたい

町並みをどう感じているか  
ここで働く人に聞きました

7年間地元を離れ、5年前に家業の布団店を継ぐために帰郷。離れてから、このまちの魅力に気が付きました。それは、歴史的な風情があり、住んでいる人も歴史を大切にする気質があるということ。ほかの観光地にも劣らない魅力です。

帰ってきて、住民や観光客が減ったように感じました。そこで、外国人や若い人も魅力を感じてもらいたいと思い、脱出ゲームを企画。モニターツアーで外国人にも体験してもらったところ、すごく喜んでくれました。これからも若い人や外国人に来てもらえるような仕掛けを考えていきます。



山田幹子さん(37)

ゆったりとした癒しの雰囲気の魅力

子どもの頃は、当たり前風景で魅力に気が付きませんでした。大人になり、明治村の魅力に伝えたいと思い「遠山之里」に就職しました。このまちは、歴史的な建物があり、ゆったりとした非日常的な癒しの雰囲気を味わえる魅力があります。

遠山之里では、観光客に楽しんでもらえるように、昨年よりも企画展を多く実施。若い人にも魅力を感じてもらえるよう、コスプレのイベントも開催します。多くの人に来ていただいて、楽しい思い出を作ってほしいので、丁寧な案内を心掛け「おもてなし」の心を大切にしています。